北マリアナ大学サイパン・キャンパス訪問記

2007 年 9 月

国際交流学科 3 年　　尾島雄大

ガラパンの南方、ビーチ沿いを走り濃い緑を抜けていくと北マリアナ大学（Northern Marianas College）サイパン・キャンパスがある。大きな建物が並んでいるような造りではないが、ヤシの木があちこちに生い茂り、いかにも南国という雰囲気が漂う。北マリアナ大学は、1981 年 3 月 12 日に北マリアナ連邦の教育部門として発足した正式な国立大学である。学部は「人文・自然科学部門」と「ビジネス部門」の 2 部門で構成されており、日本人等の海外留学生、特に英語研修の受け入れも行っている。マリンスポーツや海岸でのバーベキューを楽しみながら勉強できる環境だ。

キャンパスに到着した私達は、早速 Sam McPhetres 先生の授業に出席させてもらうことになった。 まず準備した英語のスピーチで、日本大学国際関係学部と、このゼミについて紹介し、サイパンと日本が今後親密になっていくことを望むと伝え、温かい拍手で迎えられた。9 時に始まる朝一番の授業とあって、最初のうちは学生はそれほど多くはなく、授業が進行するにつれ遅れて入ってくる学生が結構多いように思えた。前

の席に座っている人もいるが、やはり教室の後ろの方に人が多い。こうした点は、日本の大学も海外の大学も同じなのだろうか。しかし、前から聞いていたことだが、授業中の学生の発言の多さは日本と異なっていた。先生が質問すると教室のあちこちから手を挙げ発言する。授業に参加しようという意欲は見習わなければならない。

「両校の交流が栄えますように」と英語でスピーチ。

授業の内容は、サイパンの歴史を大航海時代以来西欧世界と非西欧世界が接触し摩擦を起こしてきた世界史の流れの中で理解するというものだった。サイパンには、スペインや日本の統治時代に建てられた建物が現存している。私は、日本の建造物を壊すでもなく、保存するでもないというサイパンの姿勢が気になっていたので、その点を質問をし、教室内の学生の反応を伺ってみた。結果は空振りだった。先生は、「今は保存しようという動きがみられる」といったことを言っていたが、現地の学生の様子をみると、この質問に反応したようには見えなかった。私たちと同世代のサイパンの学生は、過去のことに、特に日本統治時代のことに興味を持ち合わせていないのだろうか。

授業の後は、キャンパス内を見学させてもらった。サイパンの地質や動植物の研究室が多くあり、海洋調査などもしているようである。また歴史分野の資料室では、サイパン関係の資料が充実している。キャンパスにいた学生を見渡すと、様々な人種がいるよう

な印象を受けた。やはり現地の浅黒い肌の色をしている人が多かったが、白人、アジア系など人種の多さは当然三島キャンパスより多い。ほんの短い時間の滞在見学では分からないことなのかも知れないが、人種間でかたまっているということはないようであり、人種間の意識はそれ程感じられなかったように思う。途中学生ラウンジで、同大学の学生とダーツを楽しんだ。さらに私たちのたっての希望で、体育館でバスケット・ボールの即興試合をさせてもらった。コート沿いにはひな壇状の観客席があり、その後ろの壁には Pepsi Cola や、Gatorade のロゴが書かれている、というアメリカンな雰囲気をしばし楽しんだ。

最後に。　キャンパス訪問の前夜、コンドミニアムの１階ロビーで英語のスピーチの準備と練習をしていたとき、ホテルの従業員の若者たちが興味をもって付き合ってくれた。　そして、スピーチの最初と最後に現地のチャモロ語で Håfa Adai（こんにちは)、Si Yu'os ma'åse'（ありがとう）と付け加えるのがよいとアドバイスしてくれた。言葉の使い方や発音の仕方等、笑顔で一所懸命に教えてくれたその姿勢からは、少し大げさな言い方ではあるが、現地人であることに対する誇りのようなものがうかがえた。私にとってはこれがサイパンで最初に現地の人に「学んだ」ことだった。　　どうもありがとう。